



香港日本語教育研究会が創立 40 周年を迎えられるにあたり、心よりお祝い申し上げます。

香港日本語教育研究会におかれましては、毎年 2 回日本語能力試験(JLPT)を実施していただいている他、毎年の香港小中高生日本語スピーチコンテストの開催、隔年での国際日本語教育・日本研究シンポジウムの開催、日本語教師研修会の実施等多くの活動を展開され、香港・マカオにおける日本語教育の普及・発展に貢献されております。

香港日本語教育研究会のこれまでの活動により、日本語能力試験受験者数は増加傾向にあり、昨年は 1 万 2 千人(2017 年)を突破いたしました。また、一時は減少していた日本語学習者数も今や 2 万 2 千人を超えて回復傾向にございます。この場をお借りして、これまで香港・マカオにおいて日本語教育の普及に尽力してこられた貴研究会の皆様にご敬意を表するとともに、厚く御礼申し上げます。

香港日本語教育研究会は 2013 年に外務省より外務大臣表彰を授与されております。これは香港における日本語教育の促進に尽力され、日本と香港の友好親善に寄与された功績を讃えるものであり、これもまた貴研究会のご活躍を証明するものであります。

このように、香港日本語教育研究会の当地における日本語の普及、日本に対する理解増進において果たす役割は極めて大きく、在香港日本国総領事館としましても貴研究会とこれまで以上に連携・協力を進めていくことを希望いたします。

最後に、貴研究会が今後益々御活躍・御発展されることを、心よりお祈り申し上げます。

在香港日本国総領事館
大使兼総領事
松田 邦紀

香港日本語教育研究会設立 40 周年に寄せて

香港日本語教育研究会が設立 40 周年を迎えられましたことに、心よりお祝い申し上げます。

貴会は 1978 年の設立以来、香港および周辺地域における日本語教育の普及や研究に多大なる貢献をされ、日本語能力試験の実施機関としてもご活躍くださっています。40 年もの長きに亘り、香港日本語教育研究会が日本語教育に尽力されてきたことに心からの敬意を表し、各国で日本語教育を支援する国際交流基金の理事長として、深く感謝を申し上げます。

昨今、日本と香港の結びつきがますます強固になっていると感じております。2016 年にワーキング・ホリデー制度の査証発給枠が日港双方で大幅に拡大され、より多くの若者の往来が可能となったことや、2017 年に日本を訪れる香港からの観光客が年間 220 万人を突破したことなども、それを物語っています。

日本語教育の世界に目を転じると、2009 年に新しい高校カリキュラムで日本語が正規選択科目となり、また 2011 年には統一新試験（Hong Kong Diploma of Secondary Education Examination）で日本語が選択科目となるなど、日本語が香港の公教育における外国語科目として重要な位置を占める動きが見られるのは大変喜ばしいことです。

また、情報コミュニケーション技術の発達により、「独学」で日本語を学ぶ若い世代の存在感が一層増していることにも鑑みれば、香港における日本語教育は、今後ますます躍進するものと期待しております。

最後に、香港日本語教育研究会の更なるご発展を願いつつ、香港日本語教育研究会を支えておられる皆様方の、今後ますますのご健勝、ご活躍を心より祈念いたします。

2018 年 3 月

独立行政法人 国際交流基金
理事長 安藤 裕康

安藤 裕康

香港日本語教育研究會四十週年誌慶

弘文顯德
教澤明揚

香港日本文化協會

會長 蒙德揚 敬賀

祝辞

香港日本語教育研究会 梁 安玉会長、役員と職員各位、会員の皆様、
2018年に設立40周年を迎えられ心よりお喜び申し上げます。

私は、2011年4月に現職に着任して以来、香港日本語教育研究会の活動に接してきました。「日本語能力試験」の年2回の実施、隔年で開催される「国際日本語教育・日本研究シンポジウム」の開催など様々な行事に取り組み立て立派な業績を残されています。関係者の途切れない取り組みへのご努力に敬意を表します。

例えば、2013年より小学生による暗誦の部も設けられた「香港小中高生日本語スピーチコンテスト」へ出席を毎回密かに楽しみにしています。小学生が、短い詩を記憶して、元気に、明るい声で発表します。この可愛らしい姿には、何時も暖かい気持ちになります。日本語を先ず憶え、そして使う教育を実践されていると拝察しています。中高生の発表となると日本語のレベルの高さに驚かされます。このような晴れ舞台の企画、準備、当日の運営を行われる香港日本語教育研究会の皆様の姿に更に感動が深まります。

香港と日本の社会の絆を深める重要な役割を日本語研究は担われています。私達も微力ながら今後とも協力する所存です。香港日本語教育研究会が益々ご発展を祈念申し上げます。

香港日本人商工会議所

事務局長 柳生政一

<http://www.welcome2japan.hk>

香港日本語教育研究会設立 40 周年、誠におめでとうございます。

日本語教育の普及と発展という重責を担いながら 40 周年を迎えるにあたっては、世代を超えた並々ならぬご尽力やご苦勞を乗り越えられてきたものとご推察申し上げます。

貴会が実施をされてきた香港・マカオ地区における日本語能力検定試験(国際交流基金主催)の歴史を振り返りますと、1984 年の受験者数 1,054 名からスタートし、2005 年には 1 万人に達し、2009 年をピークに 2 万人を突破しました。2010 年以降は、受験者数の減少が続く厳しい時期もありましたが、2014 年からは再び毎年増加を続け、2017 年には 1 万 4 千人を超える日本語学習者が日本語能力検定試験に挑戦されています。

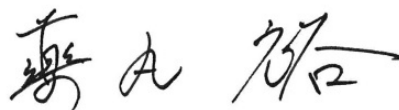
ここ数年における受験者数増加の背景には、様々な日本製品や食文化、ポップカルチャー等を積極的に受け入れ、家族で訪日旅行も楽しむ両親の下で育った年少・若年の日本語学習者という裾野の拡大があるといったお話も耳にし、非常に嬉しく、力強く感じているところです。日本語学習者の安定的な増加は、将来的な訪日旅行の拡大だけでなく、日本留学やワーキングホリデーを含めた日本での就労等、日本と香港・マカオにおける相互の人的交流や経済活動の活性化の源泉となるものでしょう。

今後も香港・マカオにおける日本語教育の更なる普及・拡大をお祈りするとともに、日本政府観光局と致しましても微力ながらご支援、ご協力を申し上げ、その一翼を担いたいと考えております。

香港日本語教育研究会の益々の発展を祈念するとともに、改めまして創立 40 周年のお祝いを申し上げ、祝辞の言葉とさせていただきます。

2018 年 3 月

日本政府観光局(JNTO)
香港事務所長 薬丸 裕



祝 辞

香港日本語教育研究会創立 40 周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。設立以来 40 年という長きにわたって、香港における日本語教育の礎を築いてこられ、またその発展に寄与してこられたご貢献に対して敬意を表すと共に、感謝を申し上げます。

海外の日本語学習者の学習動機とえば、一昔前までは「留学」や「就職」といった実利的な目的が主なものでした。最近では、アニメやマンガ、ゲームソフト、ポップミュージック、ファッションといった日本のポップカルチャーへの興味や関心から、日本語を学び始める人たちが増えています。それと共に、日本語教授法や学習法も学習者や学習動機の多様化と共に進化し変容してきていると言えるでしょう。

このような日本語教育を取り巻く環境の変化の中で、香港日本語教育研究会の今日までの取り組みは大変なものであったと推察いたします。私と研究会との交流を通して実感することは、研究会が常に時代の流れや国際社会の変化・動向を察知し、海外における日本語教育の推進に挑んでこられたことでした。研究会が日本語教育関係者だけでなく日本関係諸学の研究者にも門戸を開き、香港及びその周辺地域の日本語教育、日本研究の発展に寄与する交流の場を創造し、様々な活動を展開してこられた姿勢は、研究会の原動力かつ機動力になっていたと信じております。

海外における日本語教育は、日本との交流の担い手を育てると同時に日本に対する理解と認識を深め、日本研究の基盤を作るために重要です。教育と研究の融合を実践されている『日本学刊』は、日本語に限定されることなく、日本にかかわる今日的テーマを幅広く扱い、研究成果の発信はまさに日本の文化・文明を幅広く研究する日本学の体系化に尽力されてこられた賜物であります。研究会は、現在 12 の国・地域の学術団体から構成される「日本語教育グローバル・ネットワーク（GN）」に参加し、世界規模で研究・教育の交流と促進を図っておられます。今後、研究会の役割と機能をさらに強化されていくものと確信しております。

最後に、香港日本語教育研究会の 40 年目の節目に、皆様のさらなるご発展を祈念すると共に、益々のご活躍を願っております。

2018 年 3 月

国立大学法人東京外国語大学 副学長
公益社団法人日本語教育学会 前会長
伊 東 祐 郎

香港日本語教育研究会
梁 安玉 会長

この度、「香港日本語教育研究会」設立 40 周年に当たり、心からお祝いの意を表したいと存じます。そして、本年も中日平和友好条約締結 40 周年の節目の年であり、中国式の言い方で言えば、正に「双喜臨門」というめでたいことだと思います。

ここ 10 年来、アジアはもちろんのころ、世界も大きく変わりました。中日両国の人的往来は大きく増加し、中国大陸からの訪日旅行者の数が昨年 730 万人に達し、今後もますます増えていくに違いありません。

そして、情報化が一日も早く進んでいる社会の中で、人々や特に若者たちの情報キャッチの手段がますます便利で、ますます早くなりました。スマホの普及により、今日の日本語学習者の学習スタイルやコンテンツの入手などはより簡単になり、われわれ日本語教育界の皆さん特に第一線で活躍している日本語教師の皆さんには、より高い要求が出されていると言えましょう。

そのような状況の中で、貴会設立以来の 40 年間の努力のもとで、香港における日本語教育の発展のために、そして、日本語教育を通して、香港における日本研究の深化のために、並々ならぬ大きな貢献をされてきたことに対して、心から崇高の敬意を表したいと存じます。

これからの世界はもっとグローバル化に向かって発展するでしょう。「地球村」と言われる時代の到来により、各国と各地域の間の人的交流がますます頻繁になっていく中で、相互理解のために懸け橋になる外国語の学習と使用は、もっともっと重要視される時代が迎えられると考えられましょう。その意味で、中国ないしアジアにおける日本語教育と日本研究の需要は、もっと大きなブームが迎えられるとも期待されます。

既に 40 年も発展してきた香港日本語教育研究会は、今後もきっと今まで培われてきた世界に広がる人的なネットワークを十分に生かし、更に輝かしい歴史を造っていくに違いないと信じてやみません。

最後に、貴会の設立 40 周年記念に対して、改めておめでとうと申し上げるとともに、貴会のますますのご発展と梁安玉会長をはじめとする貴会の諸先生たちのますますのご活躍をお祈り申し上げ、祝辞の言葉とかえさせていただきます。

中国日語教学研究会名誉会長
北京外国語大学教授
徐 一平
2018 年 3 月 2 日

「香港日本語教育研究会」設立 40 周年に寄せて

「香港日本語教育研究会」の設立 40 周年にあたり、心よりお祝いを申し上げます。

「香港日本語教育研究会」は設立以来、40 年という長い歳月の間に、香港の日本語教育と日本研究の促進のために、また、各日本語教育団体との交流の拡大のために、大きな努力をなされたことに対して、心より敬意を表したいと思います。

外国語教育が学習者の人格育成に深く関わりと広く認識され、香港を含め中国の日本語学習者数が著しく増加し、またその学習目的が変化を見せるようになった今日において、日本語教育のあり方がどうであるべきか、などの問題が広く注目され、また議論されるようになりました。その研究と実践の中で、「香港日本語教育研究会」がたいへん重要な役割を果たしていると確信しております。中日両国の文化交流と民間交流の促進のためにも「香港日本語教育研究会」が大きく貢献していると確信しております。

「香港日本語教育研究会」が世界の日本語教育の発展のためにより大きな貢献をなさっていくことを期待し、今後のさらなる発展を心よりお祈りいたします。

中国日本語教学研究会会長 周異夫

祝 辞

貴研究会創立 40 周年誠におめでとうございます。冬の名残のまだ去りやらぬ時候、貴研究会におかれましては益々のご発展重ねてお慶び申し上げます。さて、今日までアメリカ、日本、韓国、香港、中国そして台湾各地の日本語教育の大会に於て梁安玉会長のお姿をお見かけしない事はございませんでした。梁会長は香港日本語教育会の代表として論文の執筆、発表また各地の日本語教育に従事する学者と常に良好な交流チャンネルを築き、香港の日本語教育研究会に多大な貢献をされてきました。私も貴研究会主催の会議にご招請いただき、梁会長にも 2010 年政治大学主催の世界日本語教育大会にご出席いただきました。これは香港と台湾の日本語教育学界の親密な関係の表れに他なりません。今後は若い世代の学者にも変わらぬ交流を続けていただきたく思います。最後に、香港日本語教育研究会の益々のご発展と皆様の健康を祈念し祝辞とさせていただきます。

台湾日語教育学会
前理事長
于 乃明教授



お祝いの言葉

香港日本語教育研究会が、この度設立 40 周年をお迎えになるのに際し、豪州シドニーよりお祝いを申し上げます。

貴研究会とのお付き合いは、2003 年の 11 月に当時会長でいらした宮副ウォン先生にお招きいただき、国際シンポジウムで講演を担当した時に遡ります。翌 2004 年には昭和女子大学で行われた日本語教育国際研究大会の場で、貴研究会と豪州日本研究学会が同時に日本語教育グローバルネットワークに加盟することとなり、その場に居合わせたのがマギー梁先生と私でした。以来、グローバルネットワークの活動等を通じて、貴研究会と豪州日本研究学会は足並みを揃えて日本語教育の世界的な連携と発展に寄与してきたと言えます。

この期間に、香港では、初等、中等教育機関での日本語教育が本格的に始まりました。一方、豪州では、学校教育における外国語に全国カリキュラムが適応されることになり、両地域が、初等、中等レベルでの日本語教育という共通課題を抱えていると言えます。また、近年、両地域から日本を訪れる観光客の数は大きく伸び続け、2017 年には香港から 223 万人、豪州から 50 万人となっています。この数字は、2011 年と比較すると、香港は 6 倍強、豪州は 3 倍という驚異的な伸び率です。両地域における日本に関する関心は非常に高まっていると言えるでしょう。

このような日本に対する関心の高まりに応えるべく、日本語教育の進展を図って行くのが、我々日本語教育関係者の役目の一つだと心得ます。また、香港では 2020 年度の日本語教育国際研究大会を主催されると聞いております。大会を機に、貴研究会が世界の日本語教育の振興に大きく寄与されることとなることでしょう。

貴研究会においては、過去 40 年間に培われた実践経験を生かし、香港の日本語教育の、また世界の日本語教育の発展の担い手として、さらなる前進を遂げられることをお祈りいたします。

トムソン木下千尋

豪州日本研究学会（元会長）

ニューサウスウェールズ大学 教授

お祝いの言葉

香港日本語教育研究会創立40周年誠におめでとうございます。

香港日本人学校中学部を代表いたしまして、心からお祝いを申し上げます。

貴会は、1978年に創立されて以来、日本語教育関係者の親睦・情報交換を目的として、日本語教育・日本研究の教育関係者・研究者の方々との学術・教育交流を進めると共に、香港における日本語教育の普及と促進に力を注がれ、現在のような素晴らしい研究会に発展してきました。

これもひとえに、会長様をはじめとする理事会、委員会の皆様、並びに関係各位の並々ならぬご尽力の賜物であると、あらためて心から敬意を表します。

貴会と日本人学校中学部の関わりの一つに、「香港小中高生日本語スピーチコンテスト」があげられます。昨年度も小学生の「詩の朗読」、中高生の「詩の朗読」、中高生の「朗読劇」、高校生のスピーチを鑑賞させていただきました。数多くの香港の子供たちが日本語を学ばれ、とてもきれいな日本語を話されていることに深く感銘を受けました。また、日本が誇る日本語の文章表現や響きを大事に学ばれていることにも大変嬉しく思いました。本校からも、生徒会役員の生徒達が参観させていただきました、質問や感想を述べさせていただきました。参観した生徒達も、香港の小・中・高校生が熱心に日本語を学んでいる様子を見て、あらためて香港の方々の日本への思いや日本語への思いを実感したのではないかと思います。

日本人学校では、海外においても日本と同等の教育を提供するという使命がありますが、併せて現地理解教育も重要な教育活動の一つととらえています。今後もお互いの言語や文化に興味を持ち、学び合うことで、香港と日本の友好関係がさらに深められればと思います。

結びにあたり、このたびの創立40周年を契機とされ、本研究会の今後ますますのご発展と皆様のご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げます。

香港日本人学校中学部
校長 小林 修

香港日本語教育研究会創立 40 周年を祝して

宇田川洋子

香港日本語教育研究会が創立 40 周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

私は、2012 年から 2015 年までの 3 年間、国際交流基金の日本語教育派遣専門家として、香港日本語教育研究会で業務を行わせていただきました。

香港の日本語教育に関して驚いたことの一つは、日本語能力試験の受験者の多さです。着任後、実際に、日本語能力の準備や運営のお手伝いをして運営の方々の熱意や手慣れた仕事ぶりに感心し、一つの会場に 1000 人近い受験者が座っている日本語能力試験会場を巡回視察に行くと、その数と熱気とに圧倒されました。

もう一つ驚いたことは、学習者の年齢層の広さ、特に、社会人学習者の多さです。国際交流基金日本語教育機関調査（2009、2012、2015 年度など）によれば、香港の日本語学習者の 7 割以上が、初等、中等、高等教育機関以外の機関の学習者、つまり、民間の語学学校や大学付属生涯学習センターの学習者です。

こうしてみると、あらゆる年齢や教育段階を繋ぐ日本語学習支援を行う香港で唯一の組織であり、香港・マカオにおける日本語能力試験の実施機関である香港日本語教育研究会で仕事をさせていただいたことは、たいへん有難かったと感謝しております。おかげさまで、幼稚園から社会人まで幅広い年齢層の学習者を対象とした様々なプロジェクトにも関わることができましたし、それら教育機関の先生方とも研修やワークショップを通じて情報交換することができました。

今、IT 機器やインターネットの普及に伴って、言語習得の方法が多様化しています。E ラーニングで学ぶ人や、日本語の歌やアニメやドラマに毎日繰り返し接しているうちに日本語を習得したという人も増えてきました。このような時代には、教育機関や年齢という枠にとられない組織による学習支援が必要とされています。そのような意味でも、香港日本語教育研究会の役割は、今後さらに重要性を増すことと思います。私も香港日本語教育研究会の会員の一人として、微力ではありますが、お役に立てるよう頑張りたいと思っております。そして、香港日本語教育研究会の、ますますのご発展とご活躍をお祈りいたします。

香港日本語教育研究会設立 40 周年に寄せて

香港日本語教育研究会が設立 40 周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

1978 年の設立以来、香港およびその周辺地区の日本語教育の普及、発展に貢献してこられたことに尊敬を表します。貴研究会歴代の会長、委員会、会員、そして事務局の方々の惜しめない尽力が、現在の香港の日本語教育の発展を支えてこられたと存じます。

私は 2015 年 3 月から 2018 年 3 月までの 3 年間、貴研究会に受け入れていただき、国際交流基金の海外派遣日本語教育専門家として業務を全うできましたのも、貴研究会のみなさまの温かいご支援とご協力のおかげです。非常に楽しく充実した日々でした。心より感謝申し上げます。

小中高生日本語スピーチコンテスト、月例会、国際日本語教育・日本研究シンポジウム、香港日本語教育セミナー、日本語教師研修セミナー、奨学金授与、『日本学刊』刊行など多くの事業を企画運営されておりますが、常に「日本語学習者のため」「教師、研究者のため」にと事業を展開されています。また、日本語能力試験の実施機関としても絶大な信頼と高い評価を得られています。貴研究会の非常に細やかな配慮と丁寧な対応のゆえだと存じます。

これからの貴研究会における事業実施、さらに新しい展開は香港だけでなくその周辺地域、世界への貢献につながっていくと確信しております。

40 周年記念事業の成功と貴研究会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

2018 年 3 月

国際交流基金
日本語教育専門家
山下 直子

命

賦

義

美

戊戌

余均灼

題

香港日本語教育研究會四十周年紀念

獻辭

本會創會會員 陳志誠

時光荏苒，不經不覺，香港日本語教育研究會成立至今，已踏入第四十個年頭，實在值得深表誌賀！

猶憶四十年前，研究會成立之初，會員很少，活動不多。其後，憑着石秋炯、原武道、余均灼、宮副裕子、李澤森、梁安玉等前後幾位會長和歷任理事不懈地策劃經營，以及不少熱心日本語教育工作者持續不斷的努力，然後發展到今天的規模。會址由中環而灣仔，再由灣仔而筲箕灣，空間較前擴大，會員相應增加，會務也得以迅速地發展。

伴隨着研究會的成長與發展的，有三項主要的工作。

首先，是經辦香港區的日本語能力試。研究會於1984年受日本國際交流基金會和日本國際教育協會所托，辦理香港地區的考試。當年全球有15個國家或地區共21個城市同時舉行考試，香港是其中之一，而且據說是日本海外應試人數最多的地區。這項每年都舉行的考試，雖然當中經過若干變動，但在香港一直由研究會辦理至今，應考的人數也由最初每年的千餘人到現在的萬多人。每次考試，過程都相當順利，進展可謂非常理想。

其次，是協辦「國際日本語教育・日本研究研討會」，該研討會在1994年首先由香港城市大學的中文、翻譯及語言學系中的日文組發起並主辦第一屆，研究會予以大力支持並成為協辦單位。其後，大約每兩年舉行一次，並由研究會輪番與香港各大專院校合辦，至今已舉行了十一屆。讓不同國家和地區的日本語教育專家、日本研究的學者以及日本教師有機會聚首一堂，不但可以增進彼此的情誼，加強相互間的交流，而且可以分享研究成果和教學心得，解決教學實踐上所遇到的種種問題。對於提高日本語教育的水平來說，可謂貢獻良多，意義重大。

再其次，是出版學術刊物《日本學刊》，這是目前唯一一本在香港定期出版關於日本研究的學術性刊物。本來，早在上世紀的90年代初研究會已有《日本語教育ニュース》的出版，但為了增加刊物的內容，擴闊學術性的領域，因而需要改為出版這本《日本學刊》。學刊除了刊登研究會的活動消息外，最主要的，就是讓不同地區的專家學者，發表有關日本研究特別是日本語教育的最新研究成果，既有理論性的，也有教學實務方面的，成為學者們難得的發表文章和相互作學術交流的平台，作用非常大。

除了上述三項主要的工作外，研究會還有些經常或不經常性舉辦的活動，例如邀請專家學者作主題演講的月會、香港日本語教師研修會、香港中小學生日本語演講比賽、香港高等院校副學士學生日本語專題研習比賽、香港日本語教師座談會、支援香港日本文化協會主辦的香港日本語弁論大賽等等，都悉力以赴，反應良好，為香港日本語教育造出很多實質的貢獻。年前曾獲日本政府外務省頒授獎狀予以表揚，那是對研究會工作的高度肯定與鼓勵，也是對研究會多年努力的成果所獲致的最佳榮耀！

如今，研究會已踏入第四十個年頭，回顧過往，固然成就驕人；展望未來，更充滿信心，孔子說：「四十而不惑」，相信往後的歲月裏，研究會在已有的基礎上，定能不迷惑、不惑亂，穩健地使會務蒸蒸日上，創造出更輝煌的成就，為香港日本語教育發揮更大的作用。這是我熱切地期望着，也是我衷心祝賀的！

40年の歩みを振り返って

李 澤森

いま改めて香港における日本語教育の歩みを振り返ってみると、1960年代後半に起った最初の日本語ブームに注目したい。当時、テレビの無料視聴が可能になり、「サインはV」「姿三四郎」「二人の世界」など日本のテレビ・ドラマに日常的に接することができるようになったことで、香港の人々が日本語に興味を持つようになったのではなかろうか。

それから10年ほどが過ぎた1970年代後半になって第2次日本語ブームが起り、日本語学習者は急増する。それまで香港が日常的に接する家電製品、カメラ、自動車などといえば欧米製品が主流であり、日本製は粗悪品の代名詞に近かった。だが、日本の技術力が飛躍的に進歩したことで、低価格ではあるが欧米製品を凌駕する品質に加え細かいアフターサービスによって日本製品が香港市場に溢れるようになる。香港の人々が日本語に興味を持つ条件が整いはじめたといえるだろう。

当時、香港における日本語の教育環境は必ずしも満足できるものではなかった。そこで香港の歴史や社会条件に応じた正しい日本語教育システムを構築しようと、当時の在香港日本総領事館文化部長の犬丸忠雄領事を中心に、香港中文大学の陳荊和教授、文化部日本語講座の大蔵親志先生、黄泰俊先生、丁紹源先生、佐藤園江先生などが集まり組織作りがはじまった。このような先生方の先駆的努力が香港日本語教育研究会の誕生につながってゆく。

この時、香港第一日文専科学学校の伊達政之校長が民間の日本語学校の代表として準備会に数回出席したが、不幸にも病を得たことで継続しての参加が不可能となり、代理を仰せつかった私が研究会設立準備会の末席を汚すこととなった。この時が、香港日本語教育研究会と私の40年に及ぶ関係の始まりである。

今にして思えば、発足当初は会員相互の親睦を深める同好会的な雰囲気も感じられ、研究会というよりは教授法や文法解説などについての相互の経験を持ち寄って意見を交換する程度であった。遅々とした歩みではあったが、次第に研究会としての体裁を整えることができた背景には、歴代会長、関係者の無償の貢献があったことが忘れられない。

現在の香港日本語教育研究会は各種のイベントを精力的に実施することにより、香港の日本語教育の充実——教育と学習の両面における質的向上と学習者の裾野の拡大など——を目指し活動を継続し、着実に所期の目標を達成しつつある。もちろん、その前提に日本語に関心を持つ多くの人々の積極的な参加と熱心な支援があることは敢えて言うまでもないだろう。

あつという間に過ぎたような40年ではあるが、思い起こせば必ずしも平たんではなかったわけではない。だが、香港の日本語教育に深い関心を抱いた人々の献身的努力があったがゆえに香港日本語教育研究会の現在がある。このことを深く記憶に留めておきたい。

1984年から日本語能力試験が実施されたこともあり、香港日本語教育研究会に対する社会的認知度も高まった。この間、会長兼事務局長の重責を担った石秋炯先生は日本語検定試験の円滑な運営に道筋をつけたばかりか、研究会の機関誌『日本学刊』の前身である『日本語教育ニュース』の出版に踏み切るという決断を下している。また研究会のウェブサイト構築、日本語能力試験受験申込オンライン化に果たした阮亦光先生の実績も忘れられない。

国際交流基金派遣日本語教育専門家の山口敏雄先生の企画によって発足した日本語教師セミナーにおける指導教官——林敏夫先生、金秀芝先生、木山登茂子先生、宇田川洋子先生、山下直子先生——歴代の専門家諸先生の日本語教育に懸ける情熱に心を強く打たれた。香港日本語教育研究会の将来を考えるなら、先生方の今後の持続的なご指導は必要不可欠だと、個人的には痛感する。

月例会の運営、『日本学刊』の編集、小中高生による日本語スピーチコンテストの実施、日本語教育・日本研究シンポジウムの開催に貢献された歴代委員長との思い出は尽きない。余均灼先生、原武道先生、宮副裕子先生、梁安玉先生、石秋炯先生の尽力によって研究会のNPO法人化が達成されたことも、研究会にとっては大きな出来事だった。

昔から「道遠ければ馬の力を知り、日久しければ人の心を知る」というが、法人化後に直面した困難を乗り越えることが出来たのも、余均灼先生、陳志誠先生の存在があったればこそだと思う。また、日本語教育の理念を日々体現されている梁安玉先生も忘れることはできない。

1980年後半になると、製造業・金融・商社などを中心とする日本企業の香港進出が顕著になり、日本語人材の必要性が高まった。これが第3次日本語ブームの背景にある。

あれから30年程が過ぎ、現在は第4次ブーム到来の時節だといわれている。円安に加え多くの格安航空会社が生まれ、香港からの日本観光が容易になったこともあり、多くの人々が日本の自然・名勝古跡・文化・食べ物などに刺激され、以前にも増して日本語への関心を払うようになった。

1960年代末から現在までの香港における日本語教育の歴史を振り返ってみると、そこに香港と日本の関りの変遷が浮かび上がってくる。同時に、それぞれの時代のそれぞれの環境において日本語教育に向き合った先人の的確な判断が香港日本語教育研究会の現在の隆盛につながったと深く思う。個人的には多くの先人の経験に学び、香港日本語教育研究会の発展に尽くしたいと考える。それがまた、半世紀余りに亘って私を育ててくれた日本語に対する私なりの恩返しではなかろうか。

——以上、日本語との個人的な付き合いを振り返りながら、香港日本語教育研究会に対する私の思いを綴ってみました。この間、教えを請うた凡ての先生、関係者、それに教室で接した多くの日本語学習者に改めて感謝の意をささげたいと思います。なお、文中に不躱な表現がありましたら何卒お許し下さい。